

10代女子向け支援 「ガールズプロジェクト」

メディアなどで報道されたボランティア活動を頑張っている中高生の姿は正しい一面ではあるものの、その描かれ方を危うく感じてしまいました。避難所では家族やカメラのないところで「疲れたあ」前向きにがんばっていいこうとしているのに、乗り切れない私はダメ」と、悶々としたつぶやきが聞かれました。

そうした10代の女子に支援が届かない現状がありました。例えば化粧品が入ってきて「20歳以上の方だけ」と言われて、大学生、10代の女子たちには行き渡らないのです。しかし、彼女たちにとっても眉を整えることが自分を保つために必要で、それがないと顔を上げられない人もいました。避難所や狭い仮設住宅に於いての毎日、どれほどのストレスや落ち込みがあるのかと私たちは思いめぐらしました。

その気持ちを汲み取って始めたのが「ガールズプロジェクト」です。被災地外の特に若い女性たちに、「10代の女子たちが喜びそうな物を送ってくださ」と募ると、多くの人からプレゼントが寄せられました。集まったプレ

ゼントを渡す機会として「ティーンズの女子会」を開催し、アクセサリーなどの手作りコーナーやメイクコーナーなども設けました。この取り組みは「災害と女の子たち」という話題に注目してもらおうきっかけにもなったと思っています。

女性エンパワーメントの 視点からの取り組み

「こういうことをしてほしい」「私たちはこう思う」「これは大変だ」

女性たちがこのような声を出すことができなかったのが3・11でした。「災害時には女性たちが声を出せない」という形で日頃のジェンダー問題が顕著に現れます。それを解決していくためには支援されている側が

声を出し、動く側になれるような働きかけが必要です。

被災して傷つく女性たちが支援する側、復興の担い手に回ることによって私たちにも何かやれることがある、力になれるということを実感していかなければならないと思いました。

女性たちは常に災害弱者者などではありません。力を持っています。その力をどう発揮するのか、自分たちの力を自覚できる場をどう設定するのか、という視点を常に意識したいと思っています。

大切なのは 話し合える関係性

2013年には、東日本大震災女性支援ネットワークの地域防災ワークショップを2日間実施し、受講した市民有志と財団スタッフとで「せんだい防災プロジェクトチーム」を作りました。チームで避難所の方にヒヤリングし、ミーティングを何回も重ねて仙台版プログラムを作成、「避難所作りワークショップ」を実施しています。ワークショップは全員が避難所の運営委員になり、運営委員会を立ち上げることから始まります。避難

パステル おすすめ本

「仙台版防災ワークショップ みんなのための避難所づくり」

東日本大震災時に避難所の中で言いたくても言い出せずに困難に直面した女性・子ども・高齢者がいたことがわかりました。同じ体験を繰り返さないように、それぞれのニーズの違いに配慮し、「話し合い」に男女がともに関わるのが重要であると書かれています。この冊子は避難所で起こりうる問題を題材にみんなで話し合いをする意義と実効性を実感できるワークショップテキストです。自主防災組織や町会の方におすすめです。

■購入の問い合わせは仙台市男女共同参画推進センター エル・ソーラ仙台
電話：022-268-8041にどうぞ



500円(税抜)
発行・編集：(公財)せんだい男女共同参画財団